心温かい人々が暮らす町
- にぎやかそ美波町 -

共助を考える！！

11月16日　新宿駅近くで野宿女性が男性に殴られて死亡した事件が起きた。外傷性くも膜下出血だった。防犯カメラに映っていた犯人の男性は、まだ見つかっていない。

残念ながら、野宿生活を強いられた人たちの命は、いつも、虫けらのように扱われ幾度となく心無い人たちの暴力で殺されてきた。

いま、コロナ禍で、自殺と共に増えたのが野宿者である。新宿の炊き出し現場には、女性の姿も増えた。背広姿の人が、その一食を求めて並ぶのも珍しくなくなった。

生きることも、食べることも大変な彼らを、どうにかサポートしようとしても、彼らが集まる新宿の公園は、火の使用が禁止されたことで、大鍋での「炊き出し」ができなくなった。寒い冬に決められた場所で長時間一列に並び、温かい一杯ではなく、栄養補助食品や、パックのトマト、バナナ、飲み物などがビニール袋に入れて受け取るだけになった。

子ども食堂には集まる支援も、野宿者の支援にはなかなか届かない。

野宿の現場で出会う、運転免許証も保険証も持っていない人の多くは、自死を覚悟して路上に出た人だという。執拗な借金取りから逃げてきた人もいれば、暴力から逃れてきた人、人間関係が崩壊して孤独のすえたどり着いた人など、理由は様々だ。確かなことは、たどり着くまでに、誰からも助けてもらえなかったということだ。絶望の果てでも、野宿の先輩たちが場所を空けてやり、手元にある大事なおにぎりを分け与えると、死ぬのを思いとどまるというのだ。野宿を強いられている人たちと共に生きようとしている友人は、野宿者世界の人間性の豊かさを私たちは知らないという。競争社会に翻弄されて、気が付いたら野宿生活になり、「俺はあいつらとは違うんだ」と肩ひじを張っていた人も、何もなくても分け与える人たちの中で、ひと月もたたないうちに顔つきまで変わってくるという。

だからこそ、この活動で一番しんどいことは支援物資の仕分なのだ。「初心者は心が折れるから、やらないよに」とベテランたちはいう。そう、送られてくる物資の中には、使い古して洗濯もしていない汚れた下着や、使いかけのクリーム、しかも、期限がとうに過ぎて腐ったものであふれるからだ。そこには、「野宿者には、この程度で十分だよね」という、送り主の心根が透けて見える。それが辛いのだ。厳しい言い方だが、ゴミを支援として送ってくる人と、野宿女性を殺した、あの男性には通底するものがある。人間への尊厳がないということだ。どのような状態でも、人は生きる権利があり、尊敬されるべき存在なのだ。なのに、新宿の食事支援の現場では、並ぶこともゆるされなくなった。ならば、自助ができるだけの環境作ってもらいたい。助けようとすることすら許されない社会に未来などないからだ。

辛　淑玉

町民一人ひとりが相手を思いやり、多様な価値観を認め合う社会をめざしましょう。

「心温かい人々が暮らす、賑やかな過疎の町」美波町であり続けるために人権について考え守っていくことがまさに、“にぎやかそ”美波町づくりにつながります。このコーナーでは人権に対する思いを掲載していきます。